

# 鳥海物語④（全6回）

## —安倍氏統治期—

平谷 美樹

わたしは胆沢川と北上川の合流近くにある段丘である。

胆沢城より北は朝廷の直接的な統治が及んでいなかった。ならば、蝦夷の国であったかと言え、そうでもない。和賀、稗貫、志波、岩手の四郡は朝廷に恭順した蝦夷⇨俘囚が支配する世界だったのである。

胆沢城が衰退し、消滅した頃に台頭してきたのが安倍氏である。四郡に胆沢郡、江刺郡を加えた六郡⇨奥六郡を実質的に統治した。

安倍氏は、朝廷の安倍氏の血筋であると主張していたが、朝廷は俘囚の首領、俘囚長という扱いをした。本当に朝廷の役人の血を引いていたのか、安倍という苗字を賜った俘囚であったのかは、今となっては分からない。

安倍頼良という男が奥六郡の主であった頃、わたしの上は賑やかだった。段丘として生まれて、現在に至るまでの間、あれほど賑わった一時期はない。十一世紀の前半である。

大きな建物が幾つも作られ、要塞が築かれた。段丘であるわた

しは、小さな谷が入り組んだ複雑な形をしていたので、防衛のための堀を掘削する必要はなく、自然のままの姿を利用された。要塞は鳥海柵と呼ばれ、頼良の三男、宗任が守った。安倍氏は鳥海柵を含めて十二の柵を築いた。各郡を治めるための役所でもあった。

百数十年にわたって、朝廷の勢力に支配され続けた土地が、やつと蝦夷の手に戻ったと地元の人たちは喜んだが、そういう単純なことではなかった。実質的には安倍氏が支配しているように見えても、組織の中では安倍氏の上には朝廷から派遣された国司がいたのである。統治しているのは朝廷であることは変わらなかった。

国司⇨朝廷から派遣された地方官は、「頼良は国への税を支払わない」と難癖をつけ、数千人の兵を差し向けた。安倍氏は迎え撃つために、俘囚は越えてはならぬという淀の衣川を渡り、国司が治める領土に兵を進めた。